駿大スポーツニュース
発行 駿河台大学 経営企画室
〒357-8555 埼玉県飯能市阿須698
☎ 042-972-1135
https://www.surugadai.ac.jp
編集・ジャパンプリント（株）

全日本の経験胸に 駿スポ

駿河台大のエース いざ!! 箱根へ

吉里　駿　よしざと しゅん

○駿河台大学 法学部3年
○大牟田高校出身（福岡県）
○5,000m　：13分57秒56
○10,000m：28分54秒02

初の全日本大学駅伝

大学駅伝の世界には、「三大駅伝」と呼ばれる3つの大きな大会がある。

新春の風物詩として名高い箱根駅伝はもちろんその1つ。箱根駅伝は他の2つと比べて知名度・注目度共に圧倒的だが、あくまで関東地域の大会なのである。

その他の2つは、毎年体育の日に開催される「出雲全日本大学選抜駅伝競走」、そして毎年11月の第一日曜日に開催される「全日本大学駅伝対校選手権大会（以下全日本大学駅伝）」。この2つは全国の強豪校が一堂に会する、その名の通りの全国大会。規模で言うならば、箱根駅伝以上だ。

2019年11月3日の日曜日。吉里は全日本大学駅伝に、日本学連選抜のメンバーとして出場することとなった。吉里が大学三大駅伝の舞台に立つのは初のことだ。大会直前、駅伝としては最大の舞台の一つに立つこととなり、不安な気持ちも大きいのではないかと話を聞いてみたところ、「プレッシャーはほとんどありません。ずっと憧れていた舞台なので、楽しみな気持ちが大きいです」と語った。

吉里が走ることとなったのは、名古屋市港区藤前～桑名市長島町（長島スポーツランド前）の2区。距離11・1㎞で、初めに大きなアップダウンはあるものの、その後は第二中継所まで比較的フラットな道が続くコースだ。

前週に箱根駅伝の予選会を全力で駆け抜けた吉里だが、「予選会では後半かなり苦しみました。しかし今回は約半分の距離とフラットなコースと思えば、いい走りができると思います」と気持ちの余裕も見せた。

そして迎えた当日。第一中継所にて19位で襷を受け取った吉里は、第二中継所地点では16位で第3走者に襷を渡した。見事3つの順位を上げたのだ。

「集団の中で走って途中で休憩を挟みながら走るつもりでしたが、最初から最後まで単独走になってしまいました。その意味では思い描いたレース展開にはなりませんでしたが、順位を上げることができたのはよかったと思います」

では、今日のレースを総括すると？と聞くと「ギリギリセーフって感じでしょうか」と笑ってみせた。

「このレースは、自分が出場することで、駿大駅伝部に勢いをつけたいという気持ちで走りました。次に走る箱根駅伝でも、チームのプラスになれるような走りをしたいと思います」とチームで同じ舞台に立つことを意識した発言も聞かせてくれた、実りの多い全日本大学駅伝となった。

徳本駅伝部監督

役割果たす走りを

今回の箱根駅伝で、学生連合はシード権相当の結果(総合順位10位以内)を求めて走るという目標を立てています。

本人は一区を希望していますが、もし走るならば前半の流れを掴む重要な役割を担うこととなります。しっかりとその役割を果たす走りをさせたいと思います。

次回チームで出場するために、この経験を活かしてほしいと思います。吉里の走りにご期待ください！

存在示す走りを

福岡県北九州市出身の吉里。高校3年生の時に出場した2016年全国高校駅伝では4区で47人中3位に入賞した実力者だ。2017年4月に駿河台大学に入学した時から期待の選手として、チームのエースと呼ばれてきた。

そして3年生となった2019年の箱根駅伝予選会では個人順位32位。1時間4分30秒は関東学生連合内では2番目にあたるタイムだ。しかし本人は「学連選抜の中で1位になりたいと思っていたので、目指していた最良のかたちではなかった」ときっぱりと語った。

昨年の4月に行われた記録会では5,000mで13分57秒56で、初の13分台を記録。10,000mでもベストを更新し続け、12月に行われた記録挑戦会では28分54秒2というタイムを出した。全日本大学駅伝でも学連選抜チームで走るなど、非常に好調に見えるが、本人に満足した様子はない。「目指しているところには全然たどり着けていないので。10,000mだったら28分30秒は大学在学中に出したいと思っているのですが、1年生の時のベストから今の伸びを考えると、練習のやり方次第ではもっと伸ばすこともできたという思いもあります」とストイックだ。

全日本大学駅伝でも箱根駅伝でも、「自分が出場することで、チームのプラスになれるような走りをしたい」と語った吉里。一人で立つ大舞台でも、チームを引っ張りたいという気持ちは強く持っている。「自分の走る姿を見てもらうことで、大学の認知度を上げたりとか、駅伝部にこういう選手がいるんだ、と駿大駅伝部をアピールしたいです。集団の中でちょっとでも目立てる走りというか、集団を動かすような走りがしたいですね」

しかしやはり最大の目標は、チームでの箱根出場だ。「入学した時から、絶対にチームで（箱根に）出場したいって思っていたんですよ。1年生の時からずっと同期と話していて、『絶対に4年生になるまでに箱根駅伝に出場するぞ』という強い思いがあります。それはずっと変わりません」

その足掛かりとなる今回の学連としての箱根出場。「存在を示す走りをします」という力強い言葉は、エースとしての覚悟だ。

駿足 Go to 箱根!! プロジェクト

駿河台大学駅伝部「箱根駅伝」応援募金のお願い

箱根駅伝本選出場へあと一歩に迫った駅伝部に、皆様からの熱い支援をお願いしております。

寄付金額

一口5千円（金額の多寡にかかわらず、有難くお受けいたします）

申込方法

駿河台大学財務課までご連絡ください。

振込用紙をお送りいたします。〈財務課 042-972-1191〉

税制優遇

本寄付金は、所得税法上の優遇措置を受けることができます。本選出場を目指し、日々厳しい練習に精進している駅伝部学生支援の募金にご協力をよろしくお願いいたします。

飯能の冬を熱くする!! 奥むさし駅伝

奥武蔵路の冬を熱く燃やせ 奥むさし駅伝

毎年1月の末に開催される「奥むさし駅伝競走大会（以下、奥むさし駅伝）」は、冬に凍える奥武蔵路を熱く盛り上げるイベントだ。沿道には地元住民のみならず、全国から駅伝ファンが駆け付け、選手たちの体をたぎらせるほどの熱い声援が送られる。そして各中継所付近に設置される接待所では地元住民たちによる温かい飲み物が振る舞われるなど、地域一丸となって盛り上げていこうという地元民の思いがひしひしと伝わる一大イベントとなっている。

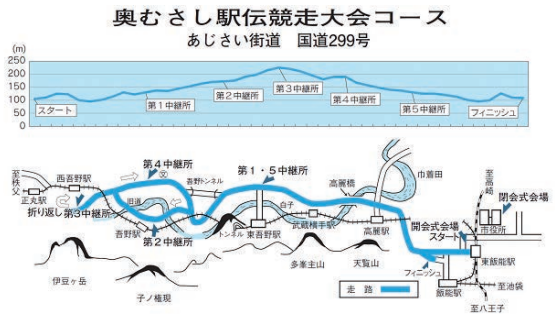
今回で第18回を迎える奥むさし駅伝は、全国から200チーム以上が出場し、単なる地域のイベントに留まらない大規模な駅伝大会だ。

2019年1月27日（日）に開催された第17回大会では、1区においてブヌカ・ジェームス・ナディワ選手が29分22秒の区間新記録を樹立、他の追随を許さない圧倒的な走りを見せ、観客の目を釘付けにした。最終順位は4位となり、惜しくも表彰台を逃す結果となった。

しかし、今年は一味違う。2019年は初の全日本大学駅伝予選会への出場を果たし、記録会では多くの選手が自己ベストを更新。10,000mのタイムでは30分を切る選手の数が圧倒的に増えた。その結果、箱根駅伝予選会では過去最高順位となる12位を獲得。

駿大駅伝部は、次回の箱根駅伝出場候補に一気に名乗りを上げるかたちとなった。

駿大駅伝部にとっては馴染みの深い奥武蔵路。今年はどんな戦いを見せてくれるのか、期待が高まる。



石山 大輝（いしやま だいき）選手に インタビュー

（現代文化学部3年・指宿市立指宿商業高校出身）

2018年の箱根駅伝予選会を終えてから主将として1年間部を引っ張ってきた石山選手。次の1年間も再び主将を任され、今見えるものは何か。

―主将を1年間やってみて、チームはどう変わってきましたか？

選手の意識は確実に変わってきました。今までは箱根駅伝予選会にだけ目を向けて練習していたという面もありましたが、6月に全日本大学駅伝予選会に初めて出場することができて、新たに向かっていくべき目標ができました。選手の中でも、年中常に気を抜けないというか。まず全日本大学駅伝に出場するためのトラックレースで結果を出さないといけない、そして全日本大学駅伝予選会に向けて練習を重ね、それが終わったら次は箱根駅伝予選会…と、どの時期も常に意識を高く持っていくことができるようになりました。

―奥むさし駅伝に挑む意気込みは？

今のところは、奥むさし駅伝が1年間で唯一チームで（襷をつなぐという意味で）出場できる大会です。やるからには絶対優勝するという気持ちで臨みたいと思います。

永井 竜二（ながい りゅうじ）選手に インタビュー

（現代文化学部1年・武蔵越生高校出身）

2019年度入学のルーキーにして、箱根駅伝予選会にも出場した永井選手。大学駅伝という新たなステージに立った今、思うこととは。

―初めての箱根駅伝予選会に出場してみてどうでしたか？

高校で出ていた大会に比べて人数、応援の規模がすごかったです。沿道に何百人、何千人といて、たくさんの方に応援してもらえていると感じたし、緊張やプレッシャーより、大規模な大会で走ることができて楽しかったです。

今回は初めてということもあり、先輩たちに支えてもらった面が大きかったと感じます。次回は、一度予選会を走っている経験を活かし、ついていくだけでなく、自分もチームを支えていきたいと思っています。

―奥むさし駅伝は、大学に入って初めての駅伝ということになりますが

記録会や陸上の大会では、走る時は一人です。駅伝もそれは同じですが、結果はチームでのものになります。襷をつなぐとなると、「みんなのために」という気持ちになるので、より一層やる気が上がってきます。すごく楽しみです。

ブヌカ・ジェームス選手に インタビュー

（メディア情報学部2年・ケニア出身）

2018年度より留学生として入学、2019年度関東インカレでは5,000m、10,000mで二冠を達成した駿大駅伝部の圧倒的エース。来日して約2年の月日が経とうとしている。

―駿大に入学して約2年。日本の環境には慣れましたか？

最初は日本の環境に慣れるのが大変でしたが、時間が経って環境に慣れてきて、授業の日本語も理解できるようになってきました。チームメイトと日本語でコミュニケーションを取ることも増えてきています。駿大での練習は、トラックの中にフィールドがあるおかげでスピード練習もできるのがいいと思っています。今は環境にも慣れたので、走ることがより楽しくなりました。

―今回の奥むさし駅伝への意気込みは？

昨年出場した奥むさし駅伝が、人生で初めての駅伝でした。お互いにサポートしあえるのが駅伝のいいところだと思います。チームワークがないと、走ること自体ができないので。

今年はチームメイトともさらにサポートし合えるようになったので、昨年よりもいい走りができると思っています。

新たな目標に向かって

2019年の箱根駅伝予選会は、駿大駅伝部にとって非常に大きな意味を持った。

春から自己ベストを更新する選手が続出。予選会登録14選手の持ちタイムは駿大史上最高レベル。選手、監督の雰囲気は昨年までと明らかに違うものとなった。

「昨年の予選会から、部活の雰囲気を変えようと思ってやってきました」と、主将の石山大輝選手は予選会を終えての挨拶で力強く語った。

具体的にはどのようにチームを変えたのかと石山選手に問うと、「主将になってから、今までなかなかできていなかった部分である、チームの中でお互いに指摘をし合える環境を作りたいと思ってやってきました」と言う。

「いままでもチームの仲は良かったんです。でも、箱根駅伝を本気で目指すチーム（の雰囲気）ではなかった。だからこそ、先輩後輩関係なく、締めるところはしっかりと締めていこうと。寮の消灯時間に見回るようにしたりなど、生活面からも体制を見直していきました」

その成果もあり、2019年6月23日（日）にはチームとして、全日本大学駅伝の予選会に駿大史上初めての出場も果たした。「結果は17位で決して満足できるものではありませんでしたが、それが逆にいい方向に向かうきっかけになりました。選手皆が『今のままでは箱根に行けない』と改めて危機感を持ち、選手たちの意識の高さを保ったまま夏合宿へ入ることができたんです」と語る。

「春先からベストを出す選手が多くなってきたのは、やはりチーム全体で意識が変わってきたから。練習メニューが大幅に変わったというわけではないです。でも、練習の質が確実に変わってきた。これまでこなせない選手が多数だった練習をこなせる選手が増えてきたのは、やはり選手たちの意識の差が大きいのではないでしょうか」

そして夏合宿を終え、迎えた箱根駅伝予選会。結果は12位と駿大駅伝部の歴史の中でも最高記録。初の掲示板入りも果たし、素晴らしい結果となったと思われたが、本戦出場のボーダーとなる10位との差はわずか1分58秒。レースを終えた直後の選手たちの目からあふれ出たのは悔し涙だった。

「今回の予選会は、エースのジェームスと吉里が先陣を切り、それ以外の10人は65分30秒を切れるように固まって走る、というレースプランだったのですが66分、67分とかかってしまった選手もいました。順位そのものよりも、もし全員が目標通りに走れていたら箱根に行けていたんだ、ということのほうが悔しかったです」

しかし、今回の予選会の結果を受け、駿大駅伝部の名は一気に知れ渡り、次回の箱根駅伝本戦出場の候補にも挙がるようになった。今回の予選会を走った、チーム内の上位8名が全員3年生以下だったことも大きな要因として挙げられる。

「新体制になってすぐミーティングもありました。そこで、2020年は箱根駅伝本戦出場権獲得、そして全日本大学駅伝の予選会突破も絶対に達成するという目標を立てました」と、一切の迷いなく言う。

「全日本大学駅伝の予選会は10,000mのレースです。そのため、10人以上が10,000mで29分台を出す。そして箱根駅伝予選会に向けては、全員が64分30秒での集団走をできるようにすることが目標です。順位だけを目標にしてしまうと他大学の出来にも左右されてしまいますが、このタイムを目標にして、その通りに走ることができれば箱根に行けるというのは確実なので」と、選手たちの間でも目指すべき場所は明確だ。

チームとしての結束をさらに強固にした駿大駅伝部。新たな目標を得た彼らの目には、箱根路が確かに見えている。